

の規模が大きくなれば、地域の自然環境の大幅な改変にもつながる。

エコツアー現場においてよく見られる例としては、靴底の土に付着した種子などが意図せずに持ち込まれるケースがある。そのため地域固有種が多く、移入種の影響が予測される地域では、エコツアー開始前に靴底を洗浄するなどの配慮が望まれる。

実際、北海道の利尻山や礼文島、東京都の小笠原母島などでは、入域前に衣服や靴底の土を落とすようにとの注意が行われている。また北海道の羊蹄山や樽前山では、自生していないコマクサの種子が、高山植物の減少を心配する愛好家によって播種された例もあり、エコツアー以外の影響がエコツアー現場に現れていることも多い。

3) 野生動物への接近や接触による影響

エコツーリストは、自然環境「そのもの」を体験したいという動機をもっている。そのため野生動物の生息地へエコツアーで入ることが多い。その一例として1.1節の知床エコツアーではヒグマとの遭遇問題に触れた。人の側もヒグマとの遭遇事故で危害を受けるが、野生動物の生態に影響を与えることには変わりはない。知床半島では「ヒグマの棲みかにお邪魔する」という考え方をとっているが、エコツアーでは野生動物が生息している自然環境に深く入り込む可能性がある。このほか、ホエールウォッチングにおいて、エコツーリストを満足させようとして観光船が競い合いクジラに近づくことも多い(写真2-4)。

このように野生動物の場合も、行動変容や繁殖行動の阻害がまず予想される。タンチョウの例のように、利用者が野鳥に近づくことによって過度なストレス

を与え、場合によっては繁殖が放棄される(Buckley, 2004)。またエコツアーのエンターテインメントのひとつとして、ガイドが野生動物を捕獲してエコツーリストに触らせたり、写真撮影のために過度に接近した



【写真2-4】観光船とマッコウクジラの接近(北海道・羅臼町沖合)

りすることも多く、エコツアーだからといって影響を軽視してはならない(写真2-5)。

エコツアーではガイドが厳しく指導するだろうが、一般の観光客による面白半分や旅先での気のゆるみによる給餌が動物の食性に与える影響は大きい。こうしたケースでは、観光客がその影響を

理解していないことも原因であり、その対策も考えなければならない。しかし、人による餌付けや同伴したペットによる野生動物への影響の報告例は少ない(例外的にLenth et al. (2008) などがある)。またこうした野生動物への影響の把握は調査に時間がかかることもあり、正確に検証するのは簡単ではない。そのため対策が遅れがちになっているのが現実である。



【写真2-5】ガイドによる野生動物(エリマキトカゲ)へのタッチング(オーストラリア・カカドゥ国立公園)

4) 排泄物やごみなどによる土壌や水質の汚染

エコツアーによる影響で、近年とくに問題になっているのが、いわゆる「山のトイレ問題」といわれる人の排泄物による影響である。長野県の梓川では大腸菌群が検出されたほか、それまで放流や地下浸透が多かった山小屋のし尿処理施設の不適切さが指摘され、改善が進められている(信濃毎日新聞社編, 2002)。現場に長時間滞在することが望ましいとされているエコツアーでは、1か所に20分ほどしか滞在しないマスツアーに比べると逆に影響が出やすい。し尿そのものによる土壌や水質の汚染が予想されるが、大小便のために植生に踏み込むことで、裸地化を促進することも指摘されている(Aikoh, 2008)。

エコツアー現場は、できるだけ手つかずの自然を望むエコツーリストの希望を反映して、水や電気もない場所であることも多い。環境配慮型のトイレの開発が進み、こうした場所のトイレの状況も改善しつつある(山のトイレを考える会, 2011)。エコツーリズムでは、環境保全のための観光施設の整備だと考